
私と少年

紺

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私と少年

【Nコード】

N4337H

【作者名】

紺

【あらすじ】

真冬の最中、傘も差さず雨に打たれ過去に懺悔を繰り返す男。そこにふと現れた無垢な少年との出会いは、果たして偶然だったのか、それとも必然だったのか――

時はもう何年前に遡るだろうか。

月と日が、あれから何回落ちたか私にはもう分からない。

失ったものの大きさは、時の波がだいぶさらってくれたように思える。

消えないカラダの傷なんて、どうでも良かった。

ただ君が、其処に居てくれるだけで、私はそれ以上を望まなかった。

深夜の公園のブランコで、雨に打たれ私はいい歳をして一体何を思い馳せているのだろうか。

虚しい。

ただ、ひたすらに虚しい。

記憶をいくら辿っても。過去にいくら懺悔しても。

もうあの日は戻っては来ないことを私は知っているのに。

彼女が、私の体を温めてくれることも無いというのに。

寒い。

体が、寒い。

こんな真冬の最中、傘も差さず雨に打たれていれば、それは凍えることだろう。

このままいつそ、眠ってしまつて君の元に帰りたいとも思う。
でも。

雨音が煩すぎて、眠れやしない。

寒さが最高の睡眠薬だとしたら、雨音は最高の不眠薬だと私は考える。

嗚呼、いつそのまま永遠の眠りに誘って貰えたなら――
それすらも君は、未だに許してくれないのだろうか。
手段はいくらでも在る。

ただ勇気が足りないだけなのか、現世に未練があるからなのか。
過去を振り返るのは、もう疲れた。

「おじさん、こんな時間になにやってるの」

ふと我に返ると、暗闇の中で一人の少年が私に話し掛けて来た。

「傘もささないで、さむくないの？ かそうか、コレ」

渡された傘は、無駄に体躯の大きい私には余りにも小さすぎる物
だった。

「ありがとう。しかし、これでは君が濡れてしまうよ」

「いいんだ。ボク、家出しにきたんだし。それに力ぜまで引ければ
よけいにママたちを困らせられるしね」

そう言つて少年は、私の隣のブランコに座った。

私は傘を折りたたんで、少年と対等に過ごそうと思った。

近くで見ると小学生中学年～高学年程か。私もこの年頃に家出を
したことはあつたかな。

厳格な父から逃れる為の拙い唯一の哀れな手段だったと、忘れか
けてた記憶の一つが蘇ってしまった。

しかし不思議と嫌な気持ちはしなかった。

少年に、問う。

「なんで、家出をしたんだい？ お母さんとケンカでもしたの？」
少年は黙つてブランコから下り、見ず知らずの私に近づいて上着
をおもむろに脱ぎ始める。

「さむっ……」

風邪を引くためだけじゃない。私に見せたい物がある。

暗闇と雨で視界が遮られる中、少年の半裸を曇り無く凝視してみると、少年の奇異な行動の意味がすぐ取れた。やはり意味は後者にあつたようだ。

「ヒドイでしょう、ボクの体のむらさきたち。服は……このままでいいや。めんどく——くしゅっ！」

私は彼に服を着るように促したのだが、頑なにそれを拒む少年。代わりに私は、着ていたコートを止む無く彼の肌の上から直接着せて、いや被せてあげた。

「いいのに、こんなモノ——くしゅん！」

これ以上無理をさせるのには、こんな幼い子にはいくら事情があるうとも酷だと思い、ふとブランコから立ち上がり少年を連れ歩こうとすると、一人の制服を着た警官らしき人物がこちらに向かって歩み寄ってきた。

隠れたいのは私の方だったが、何故か少年が私の後ろに隠れて離れようとしなない。

「失礼ですが、そのお子さんは貴方の子でしょうか？」

私は、いいえ違いますと正直に答えた。

それがこの子の為になると思ったからだ。

「するとこの子が……ふむ。失礼ですが、貴方の身分証を見せて頂きたいのですが」

この質問を恐れて私は隠れたかったのだが、これも何かの運命。

私は財布自体今本当に手元に無く、しかし果たしてそれがこの場で言い訳になるかどうか。

仕方ない。あれを見せるしか——

「早くしなさい。場合によっては貴方を誘拐罪で——！こ、これはっ……」

「これで文句は無いでしょう。この子はドコの子です？私が非を詫げる代わりに送ってあげますよ。近くならばね」

警官は先ほどとはうって変わって態度を変えてきた。

「めっそも無いです！ 非があつたのは私の方ですつ。外見や雰囲気だけでこの辺りで流行っている誘拐犯などと決め付けた私が愚かでした！ 申し訳ありませんっ！！」

これだから見せるのは嫌だったんだ。

国家権力なんて、闇溶け込んだ私にとって、要らないモノ。

しかし、状況が状況とはいえすがった自分に反吐が出そうになる。それは必死に堪えたが。

「いやね。家出の子の搜索願いが出されてまして……家も本当にここから近所ですし、その子で間違い無いと思うんですけどね。小学生の男の子がこんな時間に居るなんて、いくら公園でもそうそう無いでしょうに」

「名前も聞かずに決めつけるのはどうかと思いますが。まあ近所であれば私が送り届けますよ。……この子には、何かを感じますし、ね」

「しかし、貴方様程の方が。しかも管轄外では……」

私は彼の声を聞かなかつたふりをして、不安げな表情をして私の足にしがみ付いている少年を、家まで送り届けることにした。

道中少年が、是非家が上がって行って貰いたいと行ってくれたが、私はすぐに帰るつもりだった。この子の親の顔を記憶したら、すぐに――

「ただいま……ママ」

「心配掛けて……この子は……」

母と思われる女性の顔に、一筋の涙が頬を伝う。どうやら諸悪の根源はこの母では無い可能性が高い。

となると、あれは父の所業だったというわけ、か。
本当にこの子は私に良く似ている。

「ママ。今日はパパは……」

「……パパには言わないから。心配しないの。」

あ。す、すみませんっ！ 刑事さんですよ？！ 見ると服まで子どもに貸して下さったようで……なんとお礼をいったら良いか」

「上げてあげてよ、この人すっごくいい人だからさ！」

私のコートを着たまま、彼は家の階段を駆け上がり、その途中で手招きをしてどうやら私にこっちへ来るように、と合図を送っているようだった。

「せっかくですが、今日はもう遅いですし」

「……刑事さんが良ければ上がっていて貰ってくださいませんか？

……コートの下はもう見たでしょう。あれは今日会議で居ない、私の主人が付けたものです。体の傷もそうですが、あの子に植え付けられた心の傷は、余りに深くって、私以外の誰にも笑いを今まで見せたことはないんです……」

そう云うと、彼女は私にすぐる様に声を殺して泣いた。

全く同じだった。

そう、幼少期の私も、厳格な父に歪んだ愛を注がれ、傷付けられ、母はそれを見て、ただ黙っているしか無かった。

でも。

私にとって、それが一番の傷では無かった。

私は刑事であって罪人。法の下で守られた、誰にも裁くことが出来なかった、事故と称された深い業。

それがあの公園で起きた事件だったのと、この少年との出会いは何か運命的な物を感じる——ただの天井の見え切った大人のいち妄想であればそれに越したことはないのだが。

……。

子と母の目線に耐えられず、私はしぶしぶ家にお邪魔させて頂くことにした。

「ここがボクの部屋——！」

この年頃の子にしては綺麗な部屋だった。

おもちゃの類いも少なく、かと言って勉強道具で敷き詰められた部屋、というわけでも無かった。

「やさしくってかなしかったおじさんには、ね——」

おもちゃの宝箱のような物から、何かを取り出そうとしている少年の後ろ姿に、私の幼少期の九割が偽視感で埋まった。

「あつた！ はい、これ」

それは拳銃の弾だった。

偽物だろう。この年頃の子は憧れる対象なもんだ、そう初めは簡単に考えていた。

しかし手の平に残る感触、重み。そして……言い表せない思い、が。

私の過ぎ去った過去が喚起されようとしていた。今、まさに私のとくに枯れ果てたと思われた涙と共に——

「お、おじさん…… な、なんでないているの？」

「……運命とは酷な物なのか、それとも愛しい物なのか。何にしても、今日君に出会えたことは忘れないよ。何かあったら、すぐおじさんが力になってあげるから、ね……」

手の平に握り締められた弾は、刑事になりたての頃の私が、誤って最愛の人をあのか園で世間で罪人と云われるモノと共に、射殺してしまったまさにそれだった。

あの頃の私は若く、そして拙かった。法の救いに感謝し、周りに咎められ無かった自分とその環境をこよなく愛し、罪悪感よりもむしろ内心ほつとしていた。

ただ周りが咎めなくとも、時が私を日々蝕むことに気付いた頃には、私はまるで機械のように心無くし記憶に制御された愚かな醜

い正義の塊と化していた。

私がこの少年の力になれるかどうかは分からない。

ただ、このぶかぶかのコートの隙間から見える体中の紫達を取り除く為に、尽力を尽くせと間違い無く何か呼びかけたのを、私はしっかりと聞き逃さずに捕らえたということだけは偶然では無く、確かな記憶として刻まれたことを、ここに密かに誓った。

（後書き）

題名がピンと来なかったのが一番の悩みどころでした……

内容は拙くもスティックにはまとめられた、かと思うのですが。

ショートショートですので、短いですが。

どうぞご賞味頂ければ、と思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4337h/>

私と少年

2010年10月8日15時53分発行